

話のネタだけ考えて続きを書いていない二次創作集

飛翔するシカバネ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワタクシ、飛翔するシカバネが日々を生き、思いついたネタを解放しています。

設定やこの話を書きたいという欲が出たけどそこまで行くのが辛い、飽きた等の理由で書いていないネタ集です。

インスピレーションが湧いて話を書いても構いません。

ここに載っている作品は殆ど続きを書くつもりが無い作品ですので続きが気になる！って人は読まない事をおすすめします。

目次

『Innocent World Online』 極振りさんのVR日記	
DEX極振りくんのVR日誌	1
日曜日 サービス開始	6
合流した	13
FAIRYTAIL第一弾	
始まりの魔法使い	16
蝕む黒の霧	
欲望の霊騎士王	19
ダンジョン作成1	22
ダンジョン作成2	27
ダンジョン作成3	31
ダンジョン作成4	34
ダンジョン解放	38
ダンジョン開放2	42
東方Project	
東方異変コンサルタント	48
地盤を固める。	51
聖者無双 くサラリーマン、異世界で生き残るために歩む道く	
聖者の悪友	54
うえきの法則	
最弱からの脱却く弱虫とは言わせない!!く	59

『Innocent World Online』

極振りさんのVR日記

DEX極振りくんのVR日誌

僕は水無月 洋一。

しがない、高校生だ。

始業前の朝の教室で他人の机に座っている。

そろそろ机の主が登校してくるだろう。

僕は机の主の友人で、少し話したい話題があるからだ。

友人が教室によくあるスライド式の扉を開けて中に入ってくる。

「洋、何座ってんだよ。そこ、俺の席だぞ」

「おはよう、九乃。分かっているよ、そんな事は。話したい事があったから待ち伏せしてただけだよ」

僕は席から立ち上がる。

九乃は鞆から教科書を取り出し、机にしまう。

彼は藤寺九乃

ちなみに九乃は無くなるのが嫌だという理由できちんと持ち帰る

派だ。

そして九乃が教室に入ってきたのを見計らい、1人の女子が席に近づいてくる。

その途中彼女のファンの1人の机にぶつかってこっちに向かってきている。

ファンの久保田は机の端を見つめている。

それをどうするかで今後の反応が変わるぞ。

それはさておき。

「九乃さん！ おはようございます！ 朝一番で申し訳ないですが、

『Innocent World Online』ってゲーム知ってますか？」

「おはよう玲花」

「はい、おはようございます！ で、どうですか九乃さん？ 知ってま

す……よね？」

九乃は授業の準備が終わってないため、玲花を手でどかして準備を続ける。

玲花は前の席に座り、九乃の顔を見つめる。

そして彼女が座っている席の主人は彼女が自分の席に座っていると感動して教室を飛び出して行った。

この女子は御崎玲花^{みさきれいか}。

九乃の事が好きな女子だ。

全面的に好きですオーラを放っているのにこの朴念仁に全く気づかれない悲しき人物でもある。

先程言った通りかなりの数のファンがあり、ファンクラブを形成しており、九乃は大分恨まれているのを九乃は知らない。

そしてそんなクールな九乃が好きな女子がいてこれまたファンクラブが出来ている事を九乃は知らない。

準備が終わったのか九乃は玲花に話しかける。

『IWO』だろ？勿論知ってるぞ。最近話題のゲームだしな」

『Innocent World Online』——今最も熱いVRゲームだ。略称『IWO』。

内容は剣と魔法のファンタジー世界でモンスターと戦い、世界を救う感じの王道展開。

しかし一方で、さまざまな『スキル』を駆使して自分の思い描いた主人公としてプレイができ、やりこみ要素も多く、細部までかなり作りこまれている。

ここ最近のMMORPGと呼ばれるジャンルのゲームでは、一番気合いの入った一大作だ。

今朝も朝のニュースで開発部へのインタビュー映像をやっていた。

「実は私、偶然『IWO』を2本手にいれたんですよ。折角なので、よかったです一緒に始めませんか？」

「偶然ってお前……超人気ゲームでしかもまだ発売前だぞ？……あ

あ、清十郎さんか？」

「え、ええ。そうなんです！父から貰って、九乃さんと一緒にやったらいいって。……あの件の恩返しにもなるかと思いましたが」

「そういうことだったら遊ばせてもらおうかな」

「ほんとですか!?! やったあ！」

「いやったあく！ 九乃さんとゲーム！」

「楽しそうに話すのはいいけど、僕も話に混ざりたいんだけどいいかな？」

僕を忘れて話していたのか熱中していた玲花はこちらを向いて申し訳なさそうな顔をする。

気にしてないことを伝え、僕も話に混ざる。

「僕の話もそれだったんだ。九乃もこのゲームをやるのが気になっ
てね」

「「も」ってことはお前もやるのか？ 『IWO』」

「やるさ。九乃もやるんだったら更に楽しめそうだなーと思ってね。
話終わるのを待ってたのはそれが理由」

「なるほどな」

「ゲームで会ったらフレンド登録と一緒に冒険よろしく」

「それじゃ、放課後に私の家に来てもらっていいですか？ 早速ゲームをお渡ししますのー！」

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなり、僕達は自分の席に戻っていった。

放課後九乃は玲花の家に向かうべく一緒に帰宅した。

九乃の家は玲花の家の真反対なんだよな。

それなのに九乃は毎回一緒に下校してるんだよな。
徒歩で。

マジ九乃イケメン。

さて、僕も行きますか。

僕は家に帰らず、会社に向かっていく。

会社だが何度も来すぎて顔パスなんだよね。

僕は真っ直ぐ向かっていく。

扉を開けて中に入る。

扉に書かれた張り紙には開発局と書かれていた。

「こんにちは、どうですか？調子はどうですか。これで日曜日延期になつたら大分萎えますよ」

「お、洋一君。こんにちは。調子はバツチリだよ。それにぶつちやけ今日には出来るほどだ」

玲花の手に写っている時点でそうだろう。

ここはIWOの開発局。

ここからIWOが生まれたのだ。

何故僕がここに入れるのか。

「良く来たな、我が息子洋一よ。何のようかな？さてはゲームを強請りに来たな。この、ゲームつ子め」

「局長、子ども相手になんです？その挨拶。それにゲーム強請りにつてゲーム開発の局長の息子なら嬉しい限りじゃないですか」

僕は開発局局長の息子なのだ。

コネで早く手に入れるのは九乃や玲花だけじゃないのだ。

まあ、僕はβ版をプレイしたり、データ開発を無償で手伝ったりと
正当な報酬らしいが。

「半分正解で半分はずれ。ゲームを強請りに来たのは合ってます。あと、先日出された課題クリアしたので提出しに来ました」

「よくやった我が息子よ」

「この局長、息子をモルモットと読んでぞ?」

こんな一般的に酷い父だが頭はいい。

中二病真っ只中だが、DQNネームをつけなかった。
それだけでいいじゃないか。

「息子よ、受け取るがいい。これがIWOだ。お前のプレイを期待するぞ」

「ありがとう、父さん。期待に添えられる様に頑張るよ」

「洋一君はいい子だな。局長はあんなんなのに」

「洋一君もスキルとか称号とか局長と一緒にやばいの詰め込んだ気がするけどね」

後ろの方で父の仲間が何か言っているけど良い関係なので僕は気にしていない。

ちなみに開発に加わったと言ってもアドバイス程度とテストプレイだけだね。

後はモンスターのAIとか。

だからゲーム内容も知らないところが多い

その後、僕は家に帰宅した。

日曜日に向けて情報収集を始めた。

日曜日 サービス開始

今日からIWOのサービスが開始される。
父さんのお陰で家は裕福な方だ。

そして父さんの趣味で地下室が作られている。
地下室には父さんの研究資料や重要書類、旧作等の父さんコレクションのゲーム、そしてVR機器がある。

小さい頃から電子機器関係に関わって来たから機会関係には強い。
だからこそ、ああいう才能に恵まれたのだろうし。
そしてこれがVR専用ベッド。

VR中の疲労を軽減させる機能がついたベッドだ。
これを持っているのは殆どいないだろう。
玲花ならもっているだろう、2つ。

親とやるだろうし、今回は九乃と隣り合わせにでもなってやるんだろうし。

ファンクラブが聞いたら卒倒しそうだな。

そうして僕はVRをセットしてベッドに横になる。
後、数秒でサービス開始だ。

ファンだったらサービス開始と同時に始めるのが定石だ。

「3...2...1...0、リンクスタート」

そこは何も無い、真っ白な空間だった。

ここは最初のキャラメイク用の場所だ。

ここから姿を決め、スキルを決め、世界に度立つのだ。

『Innocent World Online の世界へようこそ。
私はナビゲーションを務める「ジャッジ」と申します。以後お見知りおき下さい』

「よろしく」

目の前に金色の羽の妖精が現れた。

その抑揚ない声と無表情な顔を設定したと思われる人の顔を思い出す。

研究者のあの人だな。

無表情からのテレは最高だと言っていたな。

『ではまず、この世界についての説明をさせて頂きます』

この世界の設定やステータス、スキルについて説明される。

事前に調べていた情報で知っていたけどちゃんと話を聞く。

父さんの事だからこの時からイベントを仕込んでいても不思議じゃない。

『それでは最初に、自身のキャラクターを作って頂きます。既存のAvatarデータが存在しますが使用しますか？』

Yes／No

目の前に青く光るウインドが表示される。

ボタンを押して選択するという事か。

僕は迷いなく、Yesをおす。

既存のキャラは他のVRゲームで使ったことのある姿だ。

お気に入りなんだよね、白髪赤目って。

なんか、裏ボスみたいで。

顔は余り変えすぎると無理やり変えてるって分かる顔の動きをす
るから嫌いだ。

色を変えるぐらいだったら違和感無い。

まあ、僕は糸目で有名だから色変えても滅多に見られることは無い
けどね。

『Loading—Avatarの同期を完了しました。続いてステ—

タスの割り振りです。ステータスポイントは割り振り出来ませんのでお気をつけて下さい』

ステータスポイント：120

Str：0

Vit：0

Int：0

Min：0

Agil：0

Dex：0

ジャツジさんの言葉の後、このような画面が表示される。

これで初期のステータスを決めるのだ。

ゲームだったら極ぶりとかしてもいいかも知れないがVRとは仮想現実。

このポイントは動きに補正をかける為に必要なポイントだ。

貴方は現実でモンスターに追いつけますか？

貴方は現実でモンスターに両断できますか？

貴方は現実でモンスターからの攻撃を耐えれますか？

そう、全て無理なのだ。

ポイント無しは補正無し。

現実で戦闘等出来る訳ないのだ。

という訳で極ぶりは普通の人なら有り得ない。

ステータスポイント：0

Str：0

Vit：0

Int：0

Min：0

Agil：0

Dex：120

まあ、僕は極ぶりだけだね。

だって極ぶりすればステ振りボーナスが入るからね。

本来ならレベルアップに20ポイントの入るんだけどボーナスは13ポイント。

レベルアップの半分の値が0から手に入る。

それは魅力的だよ。

それに俺は他の人にはない才能があるから多分何とかなるさ。

九乃は極ぶりしそうだけどね。

現実でモンスターと戦えそうなやつ第一位になりそうなやつだし。

確認のウインドでYesを押して次に進む。

『では続いて武器スキル／属性魔法スキルの選択を行ってください。選択できるスキルは一つまでです』

その瞬間に大量の武器スキルと属性魔法スキルが表示される。

何故多いかは父さんと武器マニアのあの人のせいだろう。

ここで時間を食う訳にはいかない。

僕はこれまた迷うこと無く短剣を選ぶ。

vitが0だとスタミナが無くて大きい武器は持ちづつける事も出来ない。

intが0だと魔法攻撃が激弱、その為属性魔法スキルは全部なし。

後は男の子大好きな長剣なんだが極ぶりした九乃なら長剣を選ぶだろう。

取り越し苦労ならそれでいいが余り武器が被る様な真似はしたくない。

人と違うのがいいから極ぶりにしたんだし、ここで被りたくない。なら短剣だ。

リーチは短いが小回りがきく。

そして現実的によく見知っている武器ともいえる。

まあ、一番の理由は他のゲームでも良く使ってたから何だけどもね。ゾンビゲームナイフクリアしたり、FPSでナイフキルしまくった

り色々したからね。

という訳で短剣を選択した。

『続いて武器スキル／属性魔法スキル以外のスキルを5つまで選択してください』

またもや多量のスキルが表示される。

他のゲームにもありがちな「ステップ」などのスキルや全く知らないこのゲームならではのスキルがあった。

まあ、僕はDEX極ぶりだからそれに準ずるスキルになるから大分少なくなるんだろうけどね。

結局時間がかかってしまった。

流石父さんとその研究チーム。

魅力的なスキルの数々に翻弄されてしまった。

しかし、なんとか5つ選んだぞ。

【器用強化（小）】 P S

DEX上昇 +5%

【短剣強化（小）】 P S

武器「短剣」のstr上昇 +10%、武器耐久値の減少を1／2にする

【剥ぎ取り】 A C

戦闘中のmobからアイテムを剥ぎ取る（Dex依存）
確率（低）で部位剥ぎ取り

【解体】 A C

ドロップアイテム品質、量上昇（Dex依存）

【研磨】 A C

武器「短剣」の武器耐久値の減少を1/2にする、武器「短剣」の
str上昇 + Dex×0.5%

とりあえずはこれ。

他にも良いのがあるけど、お預けだ。

スキルは全部で10覚えられる。

スキル原石というアイテムを使えば覚えられるのだ。

だったら後でもいいかと楽観的に決めた。

後はどうなるかはやってみてからだ。

『続いて防具を選択してください』

防具だが「服」「軽装」「重装」があり、そこから更に分かれるのが
v i t が無い僕は必然的には「服」装備となる。

そこで僕が選ぶのはこの装備だ。

「白衣」(i n n e r \ s h o e s) 合計Dex10 防御力5

器用さが増すので選んだ。

これを来たら全身真っ白で目だけ赤のかっこいい人になってしま
う。

チラツと一番下の服装備を見る。

黒装束……まさか九乃はこれ選ばないよな。

選びそうだな、防具選べないならとことん下を！とか言いそうだ
し。

白衣を装備すると医者のような白衣が身を包む。

中也真っ白であだ名がシロアリになりそうなくらい白だ。

最後に名前を再入力する。

『バトラー』

洋一↓洋↓羊↓ひつじ↓しつじ↓執事
というダジャレだ。

白衣の執事って少し変だけどな。

『これでキャラメイクは終了です。お疲れ様でした。それでは『Innocent Word Online』を存分にお楽しみください』

そして僕の目の前はまたもや真っ白になった。

合流した

光が収まるとそこは噴水前の広場だった。

流石、父さんだ。

開発局長の名は伊達では無い。

感慨に耽っているが、直ぐ思考を戻し、少し前に歩く。

このゲームの仕様がどうなっているか知らないが、キャラメイクが同じ場所なら重なってしまいかもしれない。

父さんなら改善しているだろうが、一応マナーだ。

しかし、広いな。

九乃達も始めたっていうからフレンド検索かけたが名前が無いからまだ、始めてないのだろう。

どうせ九乃はクノってつけるだろうし。

と思ったら噴水前に新たにキャラメイクが完了したものが現れる。全身黒づくめの男は動作やアイテム、スキルを確認するかの動きをする。

アレだな。

九乃って何考えているか分からないって言われる事が多いけど、割かし読みやすいと思うな。

多分予想通りなんだろうな。

話しかけようとするとか何かに気づき、その方向に向かう。

どうせ、玲花がいたのだろう。

自分もそっちに向かう。

そこでは玲花が明らかに顔を弄っておかしい形になった男達に絡まれていた。

しかし、装備は上等なのでβテスターなのだろう。

それを傘にしているのだろう。

まあ、ジャツジ通報一発な行為なんだがな。

案の定ジャツジが呼ばれ、その間に2人は草原に向かった。

そして自分もついていく。

「デート中済まないが俺も混ざっていいかい？」

様々な反応をしている玲花と九乃の和に混ざっていく。

デート中と言われ、顔が真っ赤になっている玲花の横で九乃が話してくる。

「その姿…洋一か」

「ここではバトラって呼んでくれ。そっちはクノとフレイでいいかな」

「そうだな。よろしくなバトラ」

「よろしく」

握手を交わす。

「とういかやつぱり、黒装飾にしたんだな。この分だと極ぶりにでもしたんだろ。クノの事だし」

「よく分かるな。バトラの言う通りSTRに極ぶりした」

「まあ、リアルでモンスター倒せる学生第1位だからな」

「なんだそのランキング」

「俺が作った」

「なにやってんだ」

「2位は俺」

「なにやってんだ。あとフレイはそろそろ戻ってこい」

「九乃さんとカップル…ハッ！今のは夢!？」

「幸せな夢見てるところ悪いけど、そろそろ狩りに行かない？」

「そうですね…ってそうだ！クノさん極ぶりにしちやっただですよ！だから走れないんです!!」

「AJIに振ってないと走れないからな」

AJIに振るとすばやさの補正だけでなく、走る際のスタミナにも

補正が入る。

それが無いということは走ると体力を消費するということ。
それではフィールドの移動が全て徒歩ということになる。

健全な学生がこのゲームを楽しみたいならAJIに振らないと移動だけで1時間使うこともあるかも知れない。

「まあ、俺はAJIにしか振ってないけど」

「何考えてんですかっー!!!」

俺とクノは熱い握手を交わす。

「STR振ってないと武器ダメージにしか入らないんですよ!他にも必要なものだからステータスにあるんですからね!」

「当たらなければどうということはない」

「何時間戦闘する気ですか!」

「最初は寄生プレイみたいになつたらすまん」

「俺もなるかも」

「私が引率役!」

「いや、これだけステータスに差があるならそれは非効率だ。バラバラに動いた方がいいな」

「そうなのか」

「相変わらずクノさんは事前知識ゼロですね。それも1つの楽しみではあるんですけど……一撃が大きいなら西の森がいいと思います。まだ、人も少なそうですし」

「俺はこの極ぶりステータスで新開拓してくる。ついでに狩りぐらいくで行くわ」

「私はバトラさんほどではないですがAJIよりなので東の方ですね」

「じゃ、また後でな」

俺はそれだけ言い残し、走り去っていく。

「最初からあんなスピードでないんですけどね」

「やっぱ極ぶりは正義だな」

そんな2人のセリフが聞こえた気がした。

FAIRYTAIL第一弾 始まりの魔法使い

「早く外に出ろ！刑務の時間だぞ!!」

朝か……

光が入ってこないこの檻のたった一つの扉から光が漏れる。

「さっさとしろー！この奴隷共が!!!」

俺は重い体を起き上がらせ、扉に向かう。

檻から出ると、他の檻からも人が出てくる。

そして俺達は上等な服を着た男についていく。

長い長い廊下を歩いて行くと広い空間に出る。

しかし、そこは外ではない。

天井は高いがキッチンとそこにある。

暗く、今が昼か夜かも分からない。

しかし、刑務の時間ということは今は朝の4時なのだろう。

「そら、さっさと自分の刑務場所に行け！」

男が持っていた木の棒で俺達の背中を押す。

俺達はそれぞれ自分の担当する仕事場所に向かう。

「その銀髪は残れ」

この中で銀髪なのは俺だけだ。

また、連中の暇つぶしか。

「そうだ、そこのお前だ。……なんだ？その反抗的な目は。ムカつく野郎だ！」

持っていた木の棒で俺の頭は思いつきり殴られる。

その衝撃に俺は膝をつく。

「俺達に反抗的な態度をとるところこうゆう目に合うなんて今に始まった

事じゃないだろ。さあ、立ち上がってこっちにこい。お楽しみはまだ終わってねえぞ」

俺は重々しく立ち上がり、男についていく。

また歩いて行き、立ち止まるとそこは先ほどでは無いが開けた空間だった。

そこには前に立つ男と同じ服を着た男達と自分と同じような格好をした少年達がいた。

歳は同じくらいだろう。

「今日はそいつか？」

「ああ、そうだ。こいつを前に出した時は勝てたからな。今日は勝つ気で行くぜ」

「そういつていつも負けてるじゃねえか」

「う、うるせえ」

俺と少年は立ち会う。

一人の少年の目は酷く濁っていた。

「さあ、お前達殺しあえ勝ったらご褒美としてパンを一つくれてやる」

俺は少年を前に構えをとる。

少年は体を前のめりさせ、その濁った目でこちらを見ている。

「やれ」

その言葉で少年に俺に近づいた。

先手必勝とばかりに殴りかかってくる。

俺はそれを軽くないなし、倒れ込む少年の腹に思いっきり蹴りを繰り出す。

その衝撃で少年は軽く、吹き飛ぶ。

そして腹を抑え、咳き込む。

俺はそんな少年に近づき、腹を踏みつける。

目から涙を流して、鼻水を垂らしながらも必死に息をしようとする。

しかし、そんな暇を与えるつもりは無い。

俺は足を上げ、再度そこを思いつ切り踏みつける。

肉を潰すいやな感触が足に伝わる。

その衝撃に少年は耐えられず、意識を手放す。

「今回の弱かったな」

「くそ、負けやがって。お前は三日間飯抜きだ！」

気絶して聞こえていない少年に向かって男は叫ぶ。

俺は男の方に向かう。

「よくやった。今日の夕飯にはパンをくれてやる。あと、4回勝てたらな」

俺は男の後ろにいる他の少年達を見る。

そこには蹲る者や息を切らしながらも立ち上がっている者、身体中に打撲痕がある者、無傷の者がいた。

こんな馬鹿げた事を4回もやるのか。

しかし、拒否権は無い。

そして負けることも。

負けたら食事が無くなる。

それだけならいいが最悪死ぬ。

それはいやだ。

俺は死にたくない。

そうして俺は前が出る。

次の相手は身体中に打撲痕がある者だ。

男達が見守る中俺は構えをとる。

どうして俺はこんな事をやっているんだ……

蝕む黒の霧 欲望の霊騎士王

貴方はアウターワールドストーリーというのを知っているだろうか。

無数の世界があり、それは単独で存在しているがそれは何処かで繋がっているという小説だ。

その中で蝕む黒の霧という話がある。

良くあるダンジョン経営物でもあり、一風変わったものともいえる。

自分でも何を言ってるかは分からない。

何故今その話をしているかというところと現在進行形でそれに巻き込まれている訳だ。

『神に捨てられ、進化が停滞し緩やかに滅びつつある世界に住みし者たちよ』

この世界が蝕む黒の霧だという事も知らなかったのだがこの声が脳内に響いた瞬間に記憶から呼び覚まされたというか、なんとというか。

『私は世界から世界へと渡るもの』

混乱していてやばい。

この後起こることも分かっているのも辛い。

たった今剣道の試合中だというのに。

攻めるに攻められないじゃないか。

『停滞せし世界に変化を与えるもの』

何だよ、折角前世の記憶あって何でもない世界に輪廻転生したかと思っただけだ。小説の世界にログインしてるじゃねーか。

『あー、うん。やっぱ格式高そうに言うの面倒だわ。というわけでここからは気楽にいかせてもらおうわ。どうせこの声が聞こえてる人間なんて殆どいないんだし』

年齢不詳から幼女ボイスに。
もうやだよ。

道場の家に生まれて、割とイケメンで今世は勝ち組だぜ、やったぜ！とか思っていたのに。

『まっ、そんな訳だからこの世界を救う。かつ、私の研究を進めるためにちよいとこの世界に対して干渉をさせてもらう』

そもそも何故記憶保持なの。

無知は罪だが知りすぎもまた罪となる気がする。

将来は安泰だったのにもうお先真つ暗だ。

『とりあえず、今この声が聞こえている連中。うん、そうそう。貴様等だ貴様等』

あーあ、今世は金持ちになつて女子にモテると思つたのになー！。

欲望のままに生きてやろうと考えて行動したのに。

剣術とかやれば頭悪くても運動出来れば恰好良くなると思つたのに。

剣道やつてるけど武士道より、騎士道の方がカッコイイと思つたからわざわざ学んだのに。

『貴様等には人間を辞めてもらうから』

魔王になつても俺はこの技術を使つていけるのか。

人型ならワンチャンあるけど獣とか魚とかなつたら終わりだな。

あと、出来れば恰好良くなりたい。

『ハッハッハー！貴様等全員随分と驚いているようだな。おう貴様、車の運転中なんだからちゃんと注意を払えよ。その貴様は銃撃戦の真つ最中か。頭下げとけ、狙われているぞ。ぷぷぷ、声に気を取られて演技をミスするとか貴様は集中が足りんなあ』

くそう、俺が何したっていうんだ。

ちよつと欲望のままに行動してただけだぞ。

人助けもしたし、人望もあるのに。

何故だ、この下心が駄目なのか。

『じゃ、詳しい説明は後でするから。とりあえずポチつとな』

そんな思考の海に沈んでいた俺の視界が真っ黒に染まっていった。
まあ、面していたから元から黒っぽいから直ぐに目が慣れるだろ
う。

そうして俺は人外、基魔王になります。

ダンジョン作成1

俺は辺りを見渡す。

先ほどまでいた剣道場だ。

何時もの剣道場とは言えないが。

人はいないし、部屋が暗い。

余りにも静かで異質な空気を放っている。

そういえば先ほどまでつけていたはずの俺は防具をつけていない。

それどころか若干白い学ランの様な格好な気がする。

ここは学ランより軍服か。

あと、全体的に身体が半透明になつてる気がする。

『素養のある人間の魔王化・スキル配備・運命の不確定化・各種法則の調整完了しました。只今より各魔王様に対してのチュートリアルを開始します』

頭の中に幼女ボイスではなく、機械音が響く。

OK Googleとかこんなんだよね。

『初めに、私は魔王様方へのチュートリアルをするために産み出された存在で以後は「ヘルプ君」とお呼びください』

ヘルプ君、宜しく願います。

『では、魔王化についての説明をさせていただきます。魔王化は私の主が素養のある人間から無作為に選択した方々に施されたもので、解除の方法はありません。お諦めください。また、何故貴方がたが魔王化の素養を持たれていたかに関しては私は知りません。なので、これに関しての質問はされても無駄です』

まだ、個別の対応はされないようですね。

人間の時の名前を思い出せないけど、名字は俺の剣道場の名前だから覚えてますけどね。

前世の名前は全く覚えてないから俺の中で慣れてるんだらう。

『では、魔王化の影響について説明させていただきます。まず、魔王になった方々には必ず与えられる二つのスキルがあります。』

記憶通りなら《迷宮創生》ダンジョンクリエイターと《魔性創生》モンスタークリエイターだったけ？

俺が思い出した記憶だけどここの世界が蝕む黒の霧という事となんとなくのストーリーだからな。

だから絶対何か間違えてると思う。

『二つ目は《ダンジョンクリエイター迷宮創生》です。』

このスキルは初回発動時は自分を中心に発動し、半径5km内を迷宮化します。2回目以降に発動した場合は自らの作ったダンジョンの構造を変化させることができます。

ダンジョン作成の詳しいイロハについてはチュートリアル終了後に各自で私にお聞きください。

なお、此方で魔王化に伴い初回発動は既にさせていただきました。それに伴い迷宮内にいた人間は全て迷宮外に出され、迷宮と外の間には一年間維持される結界を張らせていただきました。これにより迷宮内外への移動が不可能になっています。

二つ目は《モンスタークリエイター魔性創生》です。

このスキルは魔王様方に忠実な魔性。所謂モンスターを生み出すスキルです。現段階では各魔王様の特性に合わせた一種類の魔性しか生み出すことが出来ませんが各種条件を満たすことにより生み出すことが出来る魔性の種類は増えます。

詳しいことはチュートリアル終了後に私にお聞きください。

そして、これら二つのスキルに加えて各魔王様方に一つずつ固有のスキルが与えられています。

なお、まだチュートリアル途中なので、グダリ防止のためいずれのスキルも使えませんのでご注意ください』

説明前に使うとかマジでいるの？

馬鹿じゃねえの？

『では続きましてステータスの説明に移らせていただきます。『ステータス オープン』と仰ってください』

いよいよ、ステータスだ。

「ステータス オープン」

こちららこれだけが楽しみで……………

Name : 欲望の霊騎士王
Race : 欲望の霊騎士王
Class : 魔王

Level : 1

MP : 6500 / 6500

Status

筋力 0

器用 80

敏捷 80

感知 80

知力 80

精神 480

幸運 13

Skill

《《迷宮創生》《魔性創生》《欲望の霊体騎士》

Title

《《欲望の霊騎士王》

精神高つか!!

他のステータスも低い筈じゃないのに精神馬鹿みたいになってる。

幸運も高い筈なのに13の所為で不運に見える。

しかも筋力0ってどういうこと?

俺の何年間の剣道生活全て無駄だったの?

HPとSPとか無いんだけど?

『まだ、ステータスを開いておられない魔王様もいらっしやるようですが、時間短縮のため説明を進めさせていただきます。』

まずNameはそのまま貴方の名前です。なお、人間の頃の名前は既に失われておりますのでご了承を。Raceは種族です。見てわ

かるように人間以外のものになっています。それが今の貴方方の正体です。

続けてClasssについてですがこれは所謂職業というものです。ただし、魔王の場合は魔王で固定となっており、職業効果で本来の値からHP、MP、SPは十倍、幸運以外のステータスは五倍になっています。また先程上げたスキルも職業効果の一種であり、これら以外にも様々な恩恵と制約が与えられています。

HPやMPについては説明不要ですね。HPが0になったら死ぬ。MPが0になれば気絶する。とても単純な仕様です。SPというのはスタミナの事にして、こちらも0になれば気絶します。それぞれの詳しい仕様は各自で聞いてください。

なお、平均的な一般人はHP、MP、SPが40。他のステータスは10となっています』

いや、おかしいっしょ!?

俺の精神初期値何？

96？遊戯王のNo.ならブラックミストじゃねえか。

MP高い分HPとSP無しか俺は今生きているの？

……あ、なんか落ち着いた。

何だろう酷く冷静になった。

怒りはあるけど困惑が無くなった。

なにこれ？スキル？

後で確認しよう。

『Skiiirは先ほど説明したとおりです。固有スキルに関しては各自で把握してくださいませ。Titleは称号の事です。今までどのような特別なことをやってきたかを表すだけの欄なので特に気にしなくてもよろしいでしょう。

なお、Skiiirに関しては各項目に触れれば詳細が表示されますのでご安心を』

これだよね、《欲望の霊体騎士》。

後で確認しよう。

『最後に魔王である貴方方にはこれから一年をかけて自らの迷宮を作っていたことになるのですが、一年経った後はどうぞご自由にご行動くださいませ。』

世界を滅ぼすも、人間を支配するも、そして我が主の楔から逃れ復讐するも全て貴方達の自由という事です。それでは全ての皆様方。これにてチュートリアルを終了いたします。これからの魔王生をどうぞご自由にご堪能くださいませ』

その音声を最後にして声は聞こえなくなった。

1年か……長いな。

まずはスキル確認するか。

ダンジョン作成2

ステータスは変わりないからスキルの確認を。

《欲望の霊体騎士》

《欲望の精神》 + 《霊体の騎士》の複合スキル

・《欲望の精神》

所有者の欲望を常時活性化させる

所有者の欲望の活性化を保持したまま思考を冷静にさせる（どれだけ精神異常状態でも正常な思考を行える）

他者の欲求を感じ取る事が可能

他者の欲望を活性化させる事が可能

肉体が減びても自我を保ち続ける

・《霊体の騎士》

所有者の肉体を失う事で魂の真の姿となる

霊体に対する物理攻撃を無効にし物理干渉を無効にする

所有者が意識すれば物理干渉を行えるが反対に他者からも物理干渉を可能となる

鎧に憑依する事が可能

▷スキルの複合とClass魔王により新たな効果発現

つまり、俺は幽霊となったわけだ。

しかし、強いな。

心は熱く、頭は冷静にというスキルだな。

半透明なのは幽霊だからか。

そして気になる▷ボタン。

俺はそれを押してみる。

・鎧以外の意識の無い物体に憑依可能

・欲望を霊体化させ保存可能（対象の生命与奪の権利を持つ時対象にも発動可能）

・欲求や感情を霊体化させ、所有者に従う魔性とする

ほう。

これはあれだな。

TOLOVER的な事が可能になったわけだな。

よく友人に「お前つて存在がジャンプっぽいよな」って言われた事を思い出すな。

剣術もクロガネみたいな剣術だし、心は熱く頭は冷静は黒子のバスケだし、霊体なんてBLEACHじゃねえか。

とりあえず確認は出来た。

次はダンジョン作るか。

「ダンジョンクリエイター
《迷宮創生》」

スキルの発動の宣言で俺の前に半透明なスクリーンが出てきた。

何故キーボードの変わりにピアノの鍵盤なんだ。

鍵盤の何処がどの文字に対応するか何故か直感で分かる。

鍵盤の白と黒が反転しているのも俺の欲望基中二病か成す力なのか。

スクリーンにはダンジョンの現在地とダンジョン内部が映し出されている。

ダンジョンの場所だが自宅の剣道場ではなく、近くの湖の様だ。

巨大な湖でボートでのデートスポットだったのに湖とその周辺が結界に覆われている。

内部は外の結界の大きさには合わず、この剣道場の一部屋のみとなっている。

多分剣道場なのは俺が一番長くこの部屋で過ごしたからだろう。

自分の部屋よりもここが落ち着くんだよな。

しかし、外は道場だったはずなのだけだ。

当然近くにいた父や母、友人達はどうなったのだろうか。

『大体は自分がいた場所がダンジョン化しますが平均のステータスを大きく変質した者は場所が飛ばされる状況がごく稀に起こります』

ヘルプ君ありがとう。

という事は生きている可能性が高いということですか。
あまり、殺したくないから戦いたくないな。

とりあえずヘルプ君に迷宮についての事を分かりやすく纏めてスクリーンに映すように頼む。

《迷宮創生》では迷宮の構造やディテールの変更。罫の設置が可能

《迷宮創生》の機能を使うとそれに応じてHP, MP, SPが消費されるHP, MP, SPは魔王のステータスやスキルに応じて変化

消費したHP, MP, SPは時間経過で回復

迷宮内に人間がいなければ作業は命令実行直後に終わる

迷宮には出入り口を最低一つは付けなければならない

迷宮に入れる人数の調節もここで行う

迷宮のレベル⇄魔王のレベル

迷宮のレベルが上がると階層を増やしたり、複雑な構造物を建築したり、強力な罫を仕掛けたりすることができる

各階層には必ず一つは休憩所を設けなければいけない

なるほど、分かりやすい。

最後の休憩所は魔王側のデメリットだな。

そして俺のステータスの以上もついでに聞いた。

俺は霊体になったお陰でHPとSPが存在しない代わりにMPがその代わりになっているそうだ。

MPは気絶ではなく死ということだ。

精神だが何故高いのかはヘルプ君も分からないらしい。

しかし、その精神力のお陰で俺は肉体を捨て、霊体となり、HPとSPを捨てる事になったらしい。

他にもメリットデメリットがあるかもしれないがヘルプ君も分からない自体なので現時点では分からないらしい。

とりあえず人里の方向に出入口を指定。

そして完成図を出して毎日どれ位のMPを使つて建設するのか計算して予約する。

いや、出来るってヘルプ君に言われたし。

そして新しいメリツトを一つ早速見つけた。

俺はHPとSPを回復しない為その分をMP回復に使える。

つまり、俺は他の魔王よりもMP回復速度が高い。

MP0が死に直結している俺としては有難い。

とりあえずの完成イメージ図を見て俺は満足する。

湖の真ん中に城が佇み、周りを市街地で囲む。

そして市街地から人里に向かい橋がかけられている。

橋は一つのみだがその広さと長さがまたいいポイント。

湖は今のところ何も無いけど後で魔性を入れよう。

オプシオンとして雪を降らせることにして美しい雪景色になっている。

うん、冷たい谷のイルシールだ。

後はロスリック城です。

イルシールの市街地がロスリック城を囲むという夢の様な光景。

そのままだと無理だからそこは少しはいじったがな。

俺はこういう欲望にも忠実なんだ。

まだ、湖に柱を建てているだけだから何も無いけどな。

いずれは地下に罪の都を作ったりしたいな。

ダンジョンだから崩れないし。

次は魔性作ってみるか。

ダンジョン作成3

今日の分の建設が終了したので少しの休憩後、魔性を作ってみる。
モンスタークリエイト
「《魔性創生》」

迷宮創生と同じようにスクリーンと鍵盤が出現する。
ぶっちゃけカツコイイけど鍵盤すつごく使いづらい。

スクリーンには白い軍服を来た白髪赤目の半透明な男が立っていた。
た。

多分俺だ。

俺は黒髪黒目の日本男児だ。

しかし、顔が少し外人風になった程度だが元の顔の原型が残っている。
る。

これが魔王としての俺の姿だということ。

これから慣れて行かないとな。

説明はつと。

・欲望の霊騎士王

迷宮《名称未設定》の魔王。

霊体の姿を持つ。

容姿は白髪赤目の青年で白い軍服の様なものを着ている。肌は死人の様に白い。しかし服も身体も半透明な姿となっている。

情報不足につきこれ以上のデータは現在無し。

そうか、迷宮の名前も決めないといけないのか。

後、自分の名も。

何がいいだろうか。

カツコイイのがいいな。

まあ、それは後にして魔性だ。

魔性は一つしか作れなかった。

最初はスライムしか作れず、作った後に実績解除で作れるようになる

る系だと思う。

とりあえず説明文を読むか。

・ウイスプ

青白い火の玉の魔性

魔力の塊のようなもので浮遊している

空気中の魔力を吸収して魔力の質を高める

霊体系魔性はウイスプを食らう事でMPを回復可能

召喚コスト：1体につきMP1

攻撃系の魔性では無いがダンジョン内に配置すれば回復アイテムがそこらにある事になるのか。

強いな。

そして、人魂。

俺が霊体だからそれに合った魔性が生み出されるといふ訳か。

とりあえず30体生み出す。

自分の周りに青白い人魂が浮遊している。

一つ近くに寄せ、食べてみる。

味はしない。

しかし、MPが1回復した。

だが、これでは同じ事を繰り返すだけ。

俺は新たに1体生み出し、ダンジョン内を飛び回る様に命令する。

これで少しはよくなればいいが。

俺はメニューを確認する。

新たに3体の魔性が作成可能になっていた。

・スケルトン

人間の骨だけの魔性

頭蓋骨が砕かれない限り動き続ける

魔力を吸収する事で骨の強度が増していく

召喚コスト：1体につきMP5消費

・ワイト

人間の骨だけの魔性

頭蓋骨が砕かれない限り動き続ける

魔力を吸収する事で骨の強度が増していく

スケルトンと違いローブを被り、魔法に適正を持つ

使用魔法スキル《魔力弾》

召喚コスト：MP10消費

・ポルターガイスト

半透明の子供の魔性

人間の片手で持てる程度の物体に取り憑き可能

MPを消費して浮遊し、敵対者に突撃して攻撃する

召喚コスト：MP15消費

とりあえず5体つつ生み出す。

大量に召喚してもやる事も置いとく場所も無いからな。

それから俺はダンジョンを作成していった。

ダンジョン作成4

俺が魔王になってからあと1週間で約束の1年だ。
長かったな。

俺は城にある自室のテラスから外に妖しげに浮かぶ月を眺め、そう思った。

ダンジョンは無事完成し、冷たい谷のイルシールとロスリック城の合わせ技でダークソウルプレイヤーなら恐るべき舞台となったダンジョン。

更に恐ろしいのが自分たちが主人公でも無ければエストも無い現実だろう。

ダークソウルプレイヤーでも攻略出来ないようにMAPを弄っているし、敵も違うからな。

橋を渡ろうとすると強制的に夜のように暗くなる使用にしている為月が美しさに磨きをかけている。

そして何処からともなくピアノが音を奏でている。

これはBGMでは無い。

MPを常時消費でダンジョンにBGMを流せるがこれは手動だ。

後で説明しよう。

俺はこの美しく堅牢な城塞都市が自分のものだと思うと顔がニヤケてしまう。

この1年、俺はダンジョンの作成以外の事も行つた。

その上で色々と分かった事もある。

まず、スケルトンと模擬戦をした。

スケルトンだが覚える脳が無いため心配だったが動きを繰り返す事で魂に記憶され、強くなつて行くことが判明した。

そしてスケルトンとワイトには視覚が無かった。

目が無いのだ、視覚なんてあるわけ無かった。

しかし、魂を感知しているのか魔力を感知しているのか(俺も同じだが)不意打ちが効かない。

とりあえずスケルトン4ワイト1の5体1組で隊を組ませ、フォーメーションを覚えさせたりした。

感情を持たないが故の危険を顧みない合わせ技が強い。

止めをささなければ魔力を与える事で再生するので強いままに育った。

ウイスプは既に一万体を超え、ダンジョン内を浮遊している。

MPが余った時にMP100を残してウイスプにしていたらそれ位になった。

そしてウイスプは空気中の魔力を吸い、満タンになるとMP回復量は1000だった。

そして1000に到達するとウイスプは100に分裂して更に吸収を開始する。

こうしてネズミ算的に増え続けていった。

ウイスプであれば1日1回回食らう事を魔性達に許可していたので少しづつ増えていった。

魔性といえどもう一種類ポルターガイストだが俺がダンジョンに設置した家具や剣に憑依させている。

このポルターガイストだが1体のみなら常人の片手で持てるぐらいの物体に取り憑くのだがこれ一つにつき1体という訳では無かったのだ。

正確にはそれであっているのだが一つを何処に限定するかでその範囲が変わった。

部品それぞれに1体なら使えたのだ。

サイズ的にも重さ的にもパーツ一つなら憑依可能だった。

そのパーツの分ポルターガイストが必要にはなるがそれで少し重くても動かせられる。

そしてポルターガイストを剣や杖に憑依させ、スケルトンとワイトに持たせたのだ。

これでかなりの初見殺しが可能となる。

ピアノも鍵盤一つ一つに憑依させ、演奏させている。

最初は皆適当に鳴らし、酷い音だった今ではなかなかの演奏だ。

MP回復の暇つぶしだったが楽しかった。

とまあ他にも罫を仕掛けたり、魔性の数を増やしたり、魔性を育てたりしていた。

当然自分の力の確認もした。

ラスボスには勝てないだろうがかなりのチート具合に驚いている。これで生存、そして欲を満たす事ができるだろう。

「我が父にして我が王、ランスロット様。今宵の訓練のお時間になりました」

「そうか。既にそんな時間か」

俺の後ろには黒い鎧を身にまとった黒髪の騎士が膝をついていた。俺の名前だが最強の騎士ランスロットを名前にさせてもらった。

折角騎士なんだ、カッコつけたいだろう。

かといってアーサー王は違うと思う。

アーサー王は確かに騎士王だが欲望の霊騎士王とは違う。

人妻に恋をして忠義と欲望の2つを持つ裏切り者こそ相応しい。

俺も騎士道と欲望を併せ持ち、人類の裏切り者なのだ。

ここまで合うのもなかなか無いだろう。

そうして俺は欲望の霊騎士王ランスロット・デュ・ラックと名乗っているのだ。

俺は黒騎士を見る。

黒髪黒目だが日本人の様な顔の平たさが少ない。

まるで漫画のイケメンだな。

「何でしょうか我が父にして王、ランスロット様」

「いや、何……1年という年月だが長かったと思つてな。お前を生み出した時を考えていたのだ。

なあ、フェデルタ」

そういえば口調だが王だし、威厳があった方がいいかな？つて思つたので変えてみた。

そしてこの「フェデルタ」だが俺の感情を霊体化、つまり魔性にし

た。

全てを渡すと俺の感情が無くなってしまったため、一部の感情それも全てでは無いが大半を素材にして。

この時に分かったが感情を霊体化するにはMPが大量に必要なだった。

ぶっちゃけ足りなかった。

死ぬかと思った。

MP消費しながらウイスポを食らったお陰で生き延びた。

それで生まれたのがフェデルタだ。

与えた感情は忠誠心。

王になった以上いらなかなって考えて軽はずみにやってしまったものだ。

死にかけてがかなり実りのある結果となった。

説明にあった通り特殊なスキルを持ち、こちらの命令に必ず従う。

そしてそれを喜びだと感じる。

まさに、社畜。

他の感情でも命令には従うだろうが喜ぶ事は無いだろう。

自分を構成する感情に当てはまらないのだから。

忠誠心は忠義を示す事から始まる。

命令は信頼に繋がり、存在理由となる。

俺の第1の騎士に相応しい。

「フェデルタ、では今宵の訓練といこうか。1週間後にはいよいよ俺の城が世界に顕現するんだ。一切の油断をせず、世界に力を示そう」

「畏まりました。我が父にして我が王、ランスロット様」

「……………長いから重要時以外はランスロットと呼ぶ様に」

「畏まりました。ランスロット様」

1週間後、世界にダンジョンが現れた。

ダンジョン解放

その日、世界中の人々が驚嘆し歓喜し恐怖した。

驚嘆は1年前に突如として世界各所に出現した如何なる方法、それこそ某国が血気に逸り放った核ミサイルをもつてしても傷一つつけることが出来なかった球体。通称「結界」がその形を大きく揺るがせたために起きた。

驚嘆に続いた歓喜は結界の揺らぎが大きくなり、徐々にその形を崩し消え去っていくために起きた。

そして恐怖は形を崩していく結界の中から現れたものによって起きた。

なぜなら結界の中から現れたのは

醜悪な鬼たちが蔓延る砦

天を衝くほどの勢いで燃え盛る山

頂上が霞んで見えないほど高い塔

氷の薔薇で作られたドーム

異常なほど濃い霧に包まれた森

などがあつた。

その中に湖に浮かぶ絶景の都市が姿を現した。

この1週間、本当に楽しみだった。

人を殺すことでは無い。

俺の城が人に見られるという事。

ダークソウルプレイヤー者はただのパクリというかもしれない。

しかし、それが現実に行る馬鹿は俺ぐらいだろう。

くこれを見てなんていうのだろうか？

楽しみだな。

という訳で俺のダンジョンはこんな感じ。

ダンジョン名：欲望渦巻く白銀の城塞都市

支配者：ランスロット・デユ・ラック（欲望の霊騎士王）

所属モンスター：ウイスプ、スケルトン、ワイト、ポルターガイスト、ネクロナイト

概要：ダンジョン全域に雪が降り、視界を遮る。

どこからかピアノの音が不気味に訝響する。

罠に即死系は無く、ダメージを与える罠は設置されていない。幻による隠し通路や隠し扉の罠は侵入者を檻に閉じ込める。魔性は全て戦闘訓練がされており、1対1の戦闘はオススメしない。しかも、魔性は5体1組の隊を作っており、死を気にしない戦闘もかなりの強さを誇る。

ダンジョン内部に存在する名持ちの部屋にエアロックが設置され、同時突入可能な人間の数を10人までに制限しており、後続の人間が突入するためには以下のいずれかの条件を満たす必要がある。

- ・前に突入した人間が全滅する
- ・前に突入した人間が突入から一時間以上経過している

また、突入した人間が脱出するためには以下の条件をいずれか満たす必要がある。

- ・支配者の撃破
- ・突入から一時間以上経過している

尚、このダンジョンの入口にはエアロックは無く、人数制限が無い。ダンジョンボスのエリアに入るには他の名持ちを全て撃破済みでなければならぬ。

累計突入者数：0

累計撃破数：0

評価：不明（突入者がまだ存在しないため）

ちゃんと攻略しやすくなってる安心設計。

美に反する仕様にしたくないからの設計なだけだね。

人数制限は無いからな百人でも千人でも侵入可能性なんだよね。

人数多い程攻略しにくいソロプレイヤー用にしたらから攻略はしづらいだろうけどな。

多くて6人かな？

ちやんと宝箱も置いてあるよ。

ダークソウルプレイヤーなら宝箱は警戒するだろう。

その警戒あながちまちがいじゃない。

刺付きの宝箱を作成してそこにポルターガイストを憑依する事で擬似的ミミックを作りました。

普通の宝箱もあるけど入っているのはこれまたポルターガイストが憑依した剣です。

普段は使用者のサポートをするけどたまに仲間に切りかかる様になつてます。

敵の陣地で手に入れた物をそう簡単に信用しちゃだめだよ。

ダンジョンを解放して俺を殺しにくるだろう。

という訳で何個か目標を出してみる。

- 1、欲望を満たす
- 2、生きる

これだけ。

これだけって言っても集約してるだけだけどね。

2の生きるってのは魔王になってから不老らしいので生きたいってだけ。

痛いのは嫌だし、自殺なんてもつてのほかだ。

魔王の隠しスキルで俺は命乞い100%失敗だし、敵対者は魔王絶対殺すマンになってるから殺し合う運命になっている。

欲望を満たすのはそのまま。

俺の存在理由だしな。

外にも出たいし、霊体になつても性欲は衰えてないし、成長した人魂食べて分かったけど味あつたから食事もしてみたい。

やりたいこといっぱいあつて何気に充実しそうだわ。

この城が素晴らしいのも分かつてはいるけど出れないのは辛い。

外の様子を見てみるとやはり軍隊がフェンスを作り、こちらの様子

を伺っている。

外はダンジョンの周りを少し見れる程度。

ダンジョン内に敵対者が入っている時は魔性を通してでしか見れない。

まあ、視界が無いので意味無いけどね。

それにしても軍隊か。

いつかは普通の人も探索者になって入ってきて欲しいな。

今は我慢するけどね。

その為にも剣とか鎧とか盾とか宝箱に入れとかなきゃ。

強くする為に。

俺は死にたくないから全部ポルターガイストを憑依させてるけどね。

人数制限が無いから入ってきていいのに。

ああ、そうか。

他のダンジョンは人数制限あるのに俺だけ無いから逆に警戒しているのか。

俺のダンジョンはどこからでも入れる様になっているから他のダンジョンより良心的なのに。

ダンジョン開放2

入ってこない軍隊の皆様のために俺はダンジョン機能のひとつであるダンジョン内部及び、外部近辺の音を拾ってみる。

『明らかに罠だな』

『ですね、ガンマ2。他の場所からは人数制限があり侵入不可となっているのにここだけは無い。橋はこの城を囲むかのように4つ存在していますが、水辺に降りての移動も可能のようです。この分ではへりで近づくのも可能でしょう』

『雪で若干視界は悪いですがそれが妖しくこの城を映していますよね。こんな訳分らないもので無ければ有名な観光スポットになったでしょうに……』

『罠らしきものや各地の報告にある怪物なども見られない。この城主はよほどの自信家か城を自慢したい馬鹿か』

『いや、実際馬鹿でしょう。だってこれ……イルシールですし』

馬鹿で悪かったな！

というか一瞬でバレた！

くそう、俺は好きなんだよ。ダクソの中で一番、この景観が。

やれるならダクソワールド全部やりたかったわ!!

土地をくれ！土地を!!

『イルシール?どこかの場所か?ガンマ5』

『ダークソウル3っていうゲームのマップの1つです。まあ、他の場所と混ざっているし、ゲームのまんまって訳では無さそうっすけど』

『あー、ダクソか。これは不味いな』

『どういうゲームだ?』

『難易度の高いアクションRPG。初見殺しで何回死んだことか…』
『死ぬことでリスタートして攻略するのが前提とも言えるゲームです。初見で1度も死なずにクリアは無理とも言われています』

『ゲームではロードがあるけど、現実ではそうも行かない。これ作つたやつは性格悪いっすわ』

スマン。

ダクソはにわか勢でクリアはしたことないんや。
実況で見ただけなんや。

かつこよくてマインなんちゃらとかでマップ作っただけなんや。

『そのゲームと丸つきり一緒では無いだろうが最初の罠は？』

『橋を半分渡ると入口の門からトカゲの化け物が降りてきてプレイヤールを食いに来ます』

『後方にも警戒が必要です』

『ゲームと違って人数に制限無いのが救いつすね。その分人も死ぬでしようけど』

まあ、死ぬだろうな。

そういうことの罪悪感は消え失せた。

レベルは上げたいが入るかの選択肢も侵入の人数制限も取り払った。

だから好きにするといい。

こちらに容赦はなく、慈悲も無い。

あるとすれば……気まぐれ位かな。

『これより突入する。全員の参加は強制しない。志願者のみとする。そして残ったものは橋での情報を必ず持って帰れ』

『『『了解』』』

いよいよ、突入か。

では、任せたぞ。

アツペテイト

橋を進んで行くがやはり罠らしきものを発見できない。

後方の警戒や門を調査してみたが化け物の姿は無い。
橋に踏み込んだ瞬間に景色が昼から夜に変わり、月が橋を照らして
いる。

隊員の一人が言う通り、観光スポットならどれだけよかったか。
元からカップル御用達のデートスポットだったんだ。

これなら更にムードが上がることだろう。
死と隣り合わせで無ければ。

あとすこしで橋の中間部分だ。

「そろそろ中間だ。皆、警戒を」

「隊長！前方を!!」

後方に目を向けていた目を前方に向ける。

そこには白銀の鎧をつけた騎士のようなものが立っていた。

その手には長剣を持って。

「我が名はフェーデ。我らを生みし主の城下に何用かな？」

「……………」

「警戒せずとも直ぐに事を構える気は無い。それよりも貴方がたに私
は提案しに來ただけだ」

「提案、だと?」

「我らが神にして主に忠誠を。そうすれば貴方方には必ず栄光が…」

「残念だが私たちはこの国のために生きて戦うものだ。その提案には
乗れない」

「……………本当に残念です。貴方がたほどの忠誠心があればフェーデ卿
の騎士にもなれたでしょうに」

私たちは無言で銃を構え、謎の騎士に向ける。

「そう、銃を向けなくて下さい。私は争う気は本当にありません。私
は生きる意味である信仰心の元に貴方がたに布教しに参っただけで
す。ですので主の命を果たしてください、アツペティート」

「うわあああああー!!!」

叫び声が聞こえる。

後ろを振り返ると翼の生えたライオンが隊員の一人を啜えている。
残った隊員が銃で応戦するが成果は乏しい。

啜えている隊員の身体が上下に噛みちぎられる。

その瞬間に隊員の身体から何か青白いものがでる。

青白いものは隊員の姿をしている。

半透明だが着ている軍服もその顔も困惑の表情を浮かべているが隊員そのものだ。

天に召されるが如く、青白い半透明の隊員は上に登っていく。まるで魂のようだ。

上がっていた隊員は困惑の表情だったが時期に理解したのか諦めた表情で上がっていく。

仇は必ずうつ！

そう思い、ライオンに目を向けようとする。隊員の元に青白い人魂のようなものが集まっていく。

その数は次第に増えていく。

そして人魂に口のようなものが現れ、隊員の身体を食いだした。

隊員の表情は驚愕に包まれる。

「全部食べちゃダメだよ。決められた感情とエネルギーだけだからねー！」

声の方向を見ると普通の鋼色の鎧に身を包んだ背の低い騎士がいた。

しかし、その鎧は獅子の衣装がされている。

「彼がアツペティート。この邪魔な肉体を食べるボディーターを従える騎士。我らが神にして主に生み出された使徒の一人です」

「えへへ〜」

「本来ボディーターは魂を食べるソウルーターと一対の魔性ですが、主の御心はソウルーターと主の心を使い新たなる騎士を生み出したのです。肉体がある分我々より位は低いですが……」

「肉体の有無で位を決めるのか!!」

ライオンと騎士に向かって銃を撃ちながら騎士に話しかける。

「当然です。肉体を離れ、主と同じ姿になること。それおそれが最高位騎士になる為の条件ですから」

「その為に俺はもつと魂を得て、霊体になりえるようにならなければならぬんだ！」

「お前の提案にのつていたら、俺達もそうなつていた訳か……」

「当然です。………そういえばアツペティートは何をしていたのですか？姿が見えませんでした……」

「えつと……フェーデ様が提案している間に入り口近くで食事してました」

「食事？……まさかつ！」

「全滅はしてないでしょうね？」

「主様の命令で数人逃しました」

最悪は免れたが、決して良い状況じゃない。

「さて、残りも食べて差し上げなさい。私はそろそろ祈りの時間です」

「了解しました。フェーデ様」

不味いつ！

「逃げっ……」

「例え他を逃がしても貴方は逃がしませんよ。貴方の忠誠心はフェエデルタ卿をより強くさせる。そして……」

神の樂園^{エデン}ためにつ!!!」

「そういう訳だから、バイバイ」

人魂に食われながら隊員を見る。

既に息絶えだえ。

自分の身体も食われていく。

ここは危険だ。

踏み込むな。

そんな言葉を残す事もできない。

そして意識は消えていった。

隊長最後の願いは果たされる。

数日のみ。

直に人は訪れる。
欲望のままに。

混沌は始まった。

東方Project

東方異変コンサルタント

「アンタ、そこで何やってんだい？」

大きな鎌を持った女性に話しかけられる。

「何を、と聞かれましたも空を眺めているのです」

「へえ、こんな空をねえ……」

生憎の雲で空の全域を影らせ、どんよりと今にも降り出しそうな空模様。

それを私は眺めていた。

どうしてこんな所にいるのだろうか。

そんな思いを馳せて（現実逃避も含め）、空を眺めているのだ。

「アタイも一緒に見ようかなー」

そう言って女性は隣に座り込む。

「仕事中では？」

「いいさ！少しくらい。アタイも空を眺めながら話したいのさ……」

女性はニコツと笑みを浮かべた。

何かを察したのだろうか。

こんな殆ど何もない所で空を眺める自分に同情したのだろうか。

気を使ってくれたのだろうか。

「……………」

「なんだい？何かあるなら話しなよ。スッキリするよ」

やはり、気を使わせたようだ。

しかし、これを言うのは流石に空気が読めないと言われそうな……

黙り込んでいると女性が顔を掴み、目を合わせてくる。

「話しなよ」

真っ直ぐ瞳を見つめてくる。

これは喋らないといけない流れだ。

「では、失礼して…」

私はコホンツと1度咳払いをして、口を開く。

「サボりはいけません」

「……………え？」

「仕事中的なんでしょう？ならばしつかりと責務を果たすべきです。それでは上司に示しも尽きませんし、上司の顔も潰します。なにより貴方のサボりにより、業務が停止してしまうのがいけない。貴方は私くらい…と考えているのかも知れません。その1人が増えると業務というのは破綻するのです。割れ窓理論というのを知っていますか？割れている窓を放置すると誰も関心を払っていない地域と思われ、軽犯罪が起こりやすくなるというものです。つまり、窓を修繕し、軽犯罪を未然に防ぐこととなるのです。それと似たようなものです。小さなサボりを見逃さないこと。それが歪みを作らない方法です。そういう小さなところが全体の業務に影響を及ぼすのです。ですから少しくらいという考えは捨て去り、きちんと働いて定時で終わらせるのが何よりも…」

「ちよ、ちよつと待ちな！いきなりなんだい？何で慰めようとしたらアタイが説教されなきゃならないんだい?!」

言葉の奔流。

いきなりの早口に困惑する女性。

私に気を使ってくれるのは有難いですが、それと仕事は別です。

やるべき事はきちんと……………あれ？

「私はできていたのですか？」

自問自答。

しかし、答えはでない。

ここがどこか、とか。

目覚める前何をしていた、とか。

そもそもこの女性は、とか。

よりも、

私は誰なんだ？

地盤を固める。

「死者でも妖怪でも怨霊でも無い人間があそこにいたという訳ですか……」

私は広々とした宮殿の様な場所に来ていました。

あの大鎌を持った女性に言葉の奔流を浴びせた後に彼女の上司がやってきて説教されていました。

私がいいたこともあり、早目に切り上げたようです。

その後私は連行という形でこの宮殿のような場所に連れてこられました。

まあ、一切の抵抗をしていないのでスムーズに済んだことでしょう。

その後正直に全てを話しました。

全てと言っても記憶が無いことぐらいですが。

あと説教については感謝されました。

何やら手鏡を取り出し、私を写したのですが何か昔のテレビの砂嵐のように何も映りませんでした。

これには困惑があったようでもなく、情報収集を行っていました。

私のせいで業務が滞ってしまったようで申し訳なく思いますが、私自身も手伝う立場にありませんし、やれることも無いので正座して待っていました。

「しかし、どうするか。死者でなければ裁けないし、かといって生者にこの者の名前が無い。というか分からない」

待っている間に大鎌の女性（名前は小野塚小町といのだから）にこの場所について教わっていました。

ここ、地獄だそう。

ならば自身は死んだのかと運命を受け入れたのですが話によると死者名簿に名前も無ければ空きもないので多分違うそうです。

多分なのは事例がないということ、小野塚様は自身の立場的に知りえないことだそうです。

確かに知り過ぎてしまうというのは無駄に脳を使います。

要領が悪くもなれば、邪魔になる時もあります。

これくらいの方がよろしいのかも知れませんね。

まあ、サボりはダメですが。

話は戻りますが私はまるであの時、空を眺めていた時に誕生したかのように言うことです。

それならそれでも問題は無い（地獄では偶に異様なモノが生まれることがある）とのことですが、問題があるとすれば私が唯の人間だということ、それが問題だそうです。

何の力も持たない、唯の人間が生まれた。

普通生まれてくるのは新たな死神や鬼、地獄の生物や妖怪などです。

しかし、私は人間として生まれた。

死神として死者にし、輪廻をくぐらせる案も出ましたが寿命的にも長生きしそうで、未来があるという判定に至ったそうです。

幻想郷という一応人が暮らしているという場所もありますが、1度管理人に問い合わせなければならぬそうなのでその間をどうするかも議案の1つです。

偶にそもそも何故人間が生まれたのかを議論していました。

正しく会議は踊る状態という訳ですな。

「アンタはどうしたい?」

議論が白熱するなか小野塚様が私に話しかけて来ます。

「そうですね。1人で出ていっても自身の身を守ることも出来ません

し、幻想郷なるところに行くにしても路銀は必要ですから……よろしければここで下働きさせて頂きたいものです」

そう発言すると白熱していた議論も静まり、こちらを見ていました。

まるで、願ったり叶ったりという表情。

いえ、どちらかと言えば獲物をかる獣の目と言ったところでしょうか。

「よろしいのでしょうか？」

問いますが答えは帰ってきません。

これは読み間違いましたか？

そんな中小野塚様が口を開きます。

「みんな賛成みたいだよ」

そうなのですか。では、

「数日の間でしようがよろしくお願いします」

聖者無双　　くサラリーマン、異世界で生き残るために
歩む道く

聖者の悪友

俺は死んだ。

それはよく分かる。

死の瞬間はよく覚えている。

記憶が流れていくのも走馬燈というやつだろう。

しかし、今ここで目覚めている訳が分からん。

死後の世界だろうとあたりはつけているがそれにしても景色が白すぎる。

これなら死後の世界など無く、今すぐに輪廻転生の輪に廻した方が
良いのではと思案させるほどだ。

と、1人で思考の渦にハマっていると。

『不運な魂よ、転生させてやろう』

「自身で死を選んだ手前、寧ろ転生は運が良いのでは？」

何気なく会話してしまったがこれは誰の声と辺りを見渡す。

しかし、その声の主の姿は見えない。

『ガルダルディアという地球と同じく空気と水と緑がある星に転生さ
せてやろう。魔法や魔物がいる。お前ら人間が好きな世界だ』

俺の返答に無視して話は進められる。

はーん。

これはよく聞く異世界転生というやつか。

既に地球によく似たって言ってるからfalloutな生活は送
らなくても良さそうだ。

お前ら人間、という事は神か悪魔かどちらかだ。

どちらにせよ、有無を言わずに話が進むからどうって事ないが。

やらなければ死。
でつとおあらいぶつてやつだ。

『お前が思い描いているようにお前が転生するのは剣と魔法、魔物がいる世界だ。そこへ転生させるだけだ。あとはこちらで何も干渉はしない。次にステータスオープンと念じてステータスを開け』

悪魔と考えたのが読まれたか。

無愛想に話は進められた。

念じると目の前に光の板のようなものが出現し、様々な情報が文章化し、載っていた。

名前：設定されていません。

J O B : 設定されていません。

年齢：15

L V : 1 (身体レベル)

H P : 100 (生命力) M P : 50 (魔力量)

S T R : 10 (筋力)

V I T : 10 (耐久力)

D E X : 10 (器用さ)

A G I : 10 (素早さ)

I N T : 10 (知力、理解力)

M G I : 10 (魔力)

R M G : 10 (耐魔)

S P : 100 (スキル、ステータスポイント)

【スキル】

なし

【称号】

なし

『設定のリミットは一時間だ。種族、年齢は決めさせてもらった。残りは自分で決めるがいい。名前のみで家名はない。ガルダルディア

の基礎知識を頭に送る。これから一時間後にお前はガルダルディアに自動転送させる』

「その前に1ついいですか?」

ステータス表示のポイントを見て思った事が1つあった。

「ポイントは100以上は無いんですか?」

『無い』

「増やす方法は無いんですか?」

『無い』

「1つ提案していいですか?」

『?』

「勝負をしましょう、俺と。100ポイントを担保として勝負しましょう。これで100以下になろうとも俺に文句は無い」

流星にイカサマは辞めてほしいと付け足す。

『……ふっ。いいだろう。もう一つ条件としてステータスを選ぶ時間も含めて行うものとする』

「ありがとうございます、カミサマ☆」

勝負の内容はコイントス。

神が放ったコインの表裏を当てる。

当たれば賭けたポイントの倍のポイントが。

負ければポイントが無くなる。

1回目ポイント10

失敗

2回目ポイント50

成功

3回目ポイント140 (オール)

成功

これで280ポイントを獲得した。

残り時間は30分。
急いで決めなければならぬ。

このくらいでいいか。
というかもう数秒で終わりだ。
さらば今世よ。また来世。

『これで十の魂を送った。約束は守ったぞ』
『確かに。これで少しは世界が変われば面白いのですがねえ』
『凡庸な魂しか送っておらん。余程適応能力が高い者でなければ、暮らすこともままならず、困難な状況に陥るだろう』
『まあ私も貴方も干渉は出来ませんので、もらった魂を眺めるだけ眺めて、彼らが死んだらまた賭けか交換を致しましょう』
『……気が向けばな、ではな』
一つの光が消えた。

『あく今回は面白くならないかなあ』
そう呟くともう一つの光も消えた。

運命の神が、異界の主神に、男の魂を含んだ10の魂を渡した。
運命の神は、異界の主神と賭けをして負け、凡庸で危険な思想がな

い10の魂を譲渡した。

こうして地球からルシエルを含めた10の魂が、ガルダルディアに転生するのであった。

そしてその時に別の神が干渉した事に2柱の神は気づかなかつた。その神は俗に呼ばれる北欧神話の悪神であるロキ。真の名前や他の呼び名があるかも知れないが、ここではロキとさせてもらおう。

神に勝負をしかけ、その上で勝利をもぎ取つた悪運の強さ。そして平凡で危険思想のない魂に細工した。

もとより、他の世界に行つたのだ思想などその土地でいくようにも変化する。

そこから世界がどうなるかは分からない。

しかし、本来の筋道と違つた激薬は混ぜられた。

こうして地球からルシエルを含めた10の魂が、ガルダルディアに転生するのであった。

うえきの法則

最弱からの脱却く弱虫とは言わせない!!く

何故だ？

ロベルトは人間界での住処である家で外を眺めながら戦った植木たちの事を考えていた

人間なんて怖がりです弱虫のクズだ。

そのはずだ……なのにアイツらは……

「ロベルト、一次選考無事通過おめでとう！流石僕の息子だね」
背後の扉が開き、糸目の男が入ってくる。

この男が僕の父さんだ。

生まれた僕が何者かによって人間界に落とされた。

僕に会いに来る為に神候補になり、人間界を壊す手伝いをしてくれた。

「いよいよバトルも大詰めだ。もうすぐ僕は神の座を得て……君は空白の才で人間界を消すことが出来るわけだ」

そう、僕の願いは人間界を消すこと……

「父さん……」

「どうした？ロベルト？」

「僕は本当に人間を消してしまっていていいのか……？」

こんなことを話しても意味は無いのに……

それでも僕は何故かそう考えてしまった。

植木くんや佐野くん、鈴子の姿を見て人間はそこまで汚く無いと思ってしまうんだ。

「そうか、それを悩んでいたのか。だったらもっと早く父さんに言ってくれれば良かったのに……」

「父さん……！」

「言ってくれば直ぐに分かったのに……君がもう、使い物にならないってことがね！」

「え？」

使い物にならない？

父さんは何を言ってる？

「でも良かった。そんなことじゃないかと思ってる君の代わりは呼んであるんだ！君よりよっぽど優秀な奴だよ」

「何言ってるの？父さん!？」

「嫌だなあ。僕はそんなに凄くもないし、優秀でもないよ！」

部屋の隅の暗がりから声がした。

見ると変な模様の服を着た白髪の男が立っていた。

今喋るまでなんの気配も無かった。

その男は父さんにアノンと呼ばれ、アノンは父さんと呼んだ。

父さんと思っていたその男は姿は父さんでも偽物だったのだ。

そして何者かに落とされたはずだったのに父さんの偽物が僕を人間界に落としたらしい。

らしい、と言ったがもう、确实だ。

これは父さんじゃない。

人間を恨ませる為に落とした。

何故そんなことをしたのか聞いたが答えてくれるはずもなく、アノンが戦いを挑んできた。

「面白い！お前の努力とやらを見せてもらおうか!!」

「8分か。思ったよりも時間がかったが……上出来だ」

僕はアノンに敗れさり、地に伏していた。

アノンにかすり傷しか与えられずに僕はやられた。

最強の十ツ星神器である【魔王】が通じないなんて……

人間でも……天界人でもないのか!!?

「じゃ、悪いけど……いただきます!!」

アノンが手を伸ばしてくる。

これをされれば僕はもう何も出来ない。

そう、分かってしまったが体が動かない。

すまない……植木くん……

君とまた戦う約束……果たせそうにもない……

アノンが僕の首を掴む……その瞬間に夜闇の中から鎌が飛来する。
「おっとー」

アノンは視覚外からの攻撃にも対応して避ける。

しかし、伸ばしていた手を離れた為に僕から距離をとる。

僕はこの能力に見覚えが合った。

しかし、彼は植木くんに敗れて能力を失ったはずじゃ……

「貸一つだからな、さっさと起きれよ……ロベルト」

そこにいたのはアレッシオだった。

「あれ？君は誰かな？」

「彼はロベルト十団の一人のアレッシオ君だね。しかし、おかしい？君は植木くんの鉄でやられたはずじゃ？」

「ご生憎さまでピンピンしてるよ。流星に直撃だったら危なかったな。植木が初めて使ったおかげで威力が弱かったのと腹に仕込んでおいた土を鎌に変えて衝撃を分散させたのがでかいかな？後は単純に俺が丈夫だったただけだ」

「へえ〜それでそのアレッシオくんがなんのようかな？」

「なんのようってロベルトに忠誠を誓ったのがロベルト十団だろ。そのロベルトがやれてるのに来ない訳にはいかないだろ」

という訳で、と付け足すとアレッシオくんは僕を担ぎ上げる。

「ロベルトを連れては行かせないよ」

「アノン……だったか？お前の能力は適当な奴に使えよ。まだ、手駒はいるんだろう？」

父さんの偽物は凶星なのか黙ってこちらを睨みつける。

「大丈夫だよ、父さん。この男はここで倒せばいいだけだしね」

「そう簡単にやられるか！」

アレッシオは土をアノンに向かって投げる。

投げた土は空中で鎌へと変わる。

「こんなもの……」

アノンが手で弾こうとする……が。

「……レベル2」

アレツシオが何か呟く。

「!?」

その瞬間にアノンの指が宙を舞った。

その場にいるアレツシオを除く全員が言葉を失った。

レベル2の能力だと言うことは予測できる。

しかし、それがどんな能力なのか検討もつかない。

ただでさえ能力によって土が鎌になっていたのにそれが消えたのだから。

「これでオ1つ失った訳だがそれでも俺の才は大量にあるんでね。次は指じゃなくて首が飛ぶぜ」

アレツシオとアノンは睨み合う。

緊迫した空気の中丸いボールの様なものが2人の間に入り、破裂する。

すると視界が真っ白に染まる。

破裂の刹那、アレツシオは2階から飛び降り、森の中をかけていく。担がれた僕はアレツシオに問いかける。

「なんで逃げる!!」

「流石に今は勝てないからな。頼みの綱である天界人のお前がズタボロの状態じゃ相手にならねえ。悔しいだろうが引くしか無いだろう」

「さっきの煙幕は?」

「仲間の1人に頼んでおいた。逃げる準備が出来次第煙幕を投げ込めってな」

「マーガレットを取り込んでいるなら人間の財産に手を出せねえ。アノンは強いだろうがさっきの戦いを見るに遠距離攻撃の手段が乏しい。逃げるには今しかない」

森を抜けるとジェット機が発射の準備を整え待っていた。

「とりあえず飛び立つぞ。後の話は安定してからだ」